

プレイバックシアター実践者に求められる純粹性

～教育分析等の有益性について考える～

スクール・オブ・プレイバックシアター 日本校

平成26年1月10日

鈴木 昭子

目次

要旨

序章

はじめに

I章 教育分析について

(1) 心理療法の世界における教育分析とその必要性について

II章 プレイバックシアターとカウンセリングの世界の共通点

(1) プレイバックシアターとカウンセリング

①不可欠な要素

②社会貢献

③治療効果

(2) プレイバックシアター実践者とカウンセラー

①必要とされる能力とスキル

②深い感情を扱える能力とスキル

③社会的責任

III章 プレイバックシアター実践者の現状

(1) プレイバックシアター実践者の課題

(2) テラーから見たプレイバックシアター実践者の姿

(3) プレイバックシアター実践者に求められる純粋性

IV章 プレイバックシアター実践者が教育分析等を受けることの効果について

V章 結論

最終章

終わりに

謝辞

要旨

本研究の目的は、プレイバックシアターとカウンセリングの実践者における共通点を見出し、カウンセリングの実践者において有益である教育分析及び自己分析等が、プレイバックシアターの実践者にとっても有益であることを探求するものである。ここにプレイバックシアター実践者とカウンセリング実践者、両者の持つ「純粋性」が、それぞれの場に大きく影響を及ぼすことが考えられるため、カウンセリング実践者に必要とされている教育分析及び自己分析等の手法がプレイバックシアター実践者にも有益であることが考えられる結果に至った。

序章

はじめに

筆者が本研究に取り組むこととした目的は、ストーリーが演じられた後、傷ついてしまったテラーの姿を目の当たりしたときに、そうした事態を回避するため、プレイバックシアターの実践者は何ができるかと考えたことからであった。そのとき語られたストーリーは今でも忘れられない。それは父と子の長年の確執が、一気に爆発する瞬間のストーリーであった。父親役が激しくテラーズアクターの子ども役に怒りをぶつける。それに対し誰もが、テラーから語られた心情を表すテラーズアクターの心の叫びを期待していたのだが、テラーズアクターは力なくその場で下を向いて黙り込んでしまったのだ。ストーリーが終了したとき、テラーは、「自分が悪者になった気分です」と、ぼつりと語った。テラーズアクターは、自分自身の中にあつた何かによって、テラーが語ったことを忠実に再現することができなかつたのである。

このとき、筆者の中で、ひとつの経験がよみがえってきた。カウンセリングを学んでいた頃、自分がクライアントの役を担い、仕事に対する喪失感を語ったときのことである。ひとりの受講生がこう言った。「このクライアントには腹が立ちます。やる気のない部下は上司にとって大変迷惑なことです」。クライアント役であつた筆者は、「自分が悪者になった気分」に陥るとともに、何を語ってもいいはずのクライアントが「こんなことを話さなければよかった」と思ってしまったのだ。

聞き手がこういった事態を起こさないためにも、カウンセラーはより深い学びが必要とされるのであるが、その究極の方法として教育分析が存在するということを学んだ。プレイバックシアター実践者とカウンセラー。互いに、人の話を聴き、それを受け止め、表現する。この経験から、私の中で、この2つには共通点があるように思い始めてきた。

プレイバックシアターのスクールのカリキュラムとして、サイコドラマが導入されている目的のひとつに、心理療法としてのサイコドラマによって自分や他人の深い感情を扱う準備を行うためというものがある。アクターは、どのようなストーリーが語られても冷静に受け止め、テラーが語ったことを、アクターの個人的な感情に左右されずに、語られたストーリーそのままを演じることが求められている。そのために、他人の深い感情に動じない精神的な強さが必要とされているのである⁶⁾。

一方、カウンセラーの必要条件のひとつとして、「純粋性」がある。「純粋性」とは、クライアントの気持ちを、何の曇りもなくそのまま映し出す鏡のような存在であることを示す。カウンセラーは、治療関係の中で生じる自分の中に起こる自他の感情の区別をはっきりさせ、高い「純粋性」で向き合うことによって、クライアントは自分自身のより歪みのない投影を、カウンセラーの中に見出すことが可能となる³⁾。このためにも、カウンセラーには教育分析が必修条件として重要視されている。

プレイバックシアターの実践者に必要とされる、「個人的な感情に左右されずテラーが語ったことをそのまま受け止める能力」⁶⁾はカウンセラーの「純粋性」と共通する。教育分析や、その他自分自身の分析等（以下「教育分析等」）を行うことによって、プレイバックシアターの実践者もテラーのストーリーをそのまま映し出す鏡のような役割を果たすことができるのではないだろうか。

本稿の目的は、プレイバックシアター実践者への教育分析等の有益性を検証することである。教育分析等の必要性が認められ実践されることにより、プレイバックシアターの実践者は純粋性を得、個人としての成長はもちろんのこと実践者として高い能力が得られること、またテラーにとっては、自分のストーリーを何の解釈もされずに安心してそのまま体感することができるといったことが可能になることが考えられる。

I 章 教育分析について

まず、前章に掲げた教育分析とはどのようなものであるかについて、ここに挙げてみる。

(1) 心理療法の世界における教育分析とその必要性について

教育分析とは、カウンセラーの訓練の過程において、自分自身がクライアントとなり、自己を理解することや、将来治療の妨げとなりうる自らの葛藤や抑圧された問題を、自分自身で知り、また解決するために分析を受けるというものである。スイスにあるユング研究所においては、分析家を育てるために様々な課程が設けられており、その中でも教育分析は300時間以上受けることが求められている¹⁾。

カウンセラーにとって、なぜ教育分析が必要なのか。

これはC. G. ユングがその必要性を説いている。筆者はこのユング派のカウンセラーに師事したことにより、ユング分析心理学に基づき述べることとする。

教育分析について、河合隼雄の「ユング心理学入門」¹⁾には次のようなことが書かれている。

治療者は、相互変容の過程をたどるとはいっても、その人格の安定度と強さにおいて、患者にまさっているべきであると考え。この点において、ユングは自分自身が分析を受ける（教育分析）必要があることを主張し、フロイトもこれに賛成するのである。（中略）自ら生きることを意味を求めて苦闘し、解決への努力を払っていないで、どうして他人の生きることを意味を見出す仕事に役立てることができようか。ここにおいて、たんに他人を治療するとか、他人をよくするとかいったことよりも、治療者自身の自己教育、その人格の発達ということが、治療の中心課題となってくるとさえいえる。¹⁾

また、東山紘久はカウンセラーに必要な純粋性について、以下のように述べ、教育分析を受けることの必要性を問うている。

純粋性は自分自身であることである。自分自身でいられれば、相手も自分自身でいられる。自分自身の相手に対する感じが純粋に表現されれば、相手はまさに鏡に映った自分自身の歪みのない姿を見る。そこに純粋な相手の像と純粋な自分の像を得る。自他は区別され、自分の存在と相手の存在が、平等な地位と場所をもち、存在する。しかし、

人間は自分の視野や概念でしか世界をつかめない。

カウンセラーが純粹になろうとすればするほど、自他の区別をはっきりさせなければならぬ。(中略) 自分の感情なのか相手のそれなのかを区別しておかなければ、カウンセリングは成り立たないだろう。この点をハッキリさせないと、カウンセラーは自分の思いを正確にクライアントに伝えることができない³⁾。

ユングは、自分自身の分析を行い、自分自身が自己探求への深い道への入り口を辿ることが必要であるとし、これらのことを「人生の究極の目的」として「個性化の過程、あるいは自己実現の過程」であるとしており、その道は「できることならば避けたいと感じられるほどの苦難の道」であると言っている¹⁾。

ここで筆者は、プレイバックシアターのことを考えずにいられない。

日々、プレイバックシアターの道を深く歩めば歩むほど、その道への入り口がいかに困難なものなのかが解りかけてくる。まさにできることならば避けたいと思うことが山のように覆いかぶさってくる。なぜこのような困難な道に踏み入れてしまったのだろうと、ときとして立ち止まって考えずにいられない。

しかし、ユングが説き、河合がメッセージをしたためたように、それはそのことに気づいた者に課せられた人生の課題ではないだろうか。そう考えずにいられない。

II章 プレイバックシアターとカウンセリングの世界の共通点

この章では、プレイバックシアター実践者とカウンセラーの間において、実際にどのような共通点が存在するかを考察する。この章では、宗像の「プレイバックシアター入門」⁶⁾に基づき、検証を行う。

(1) プレイバックシアターとカウンセリング

まずはプレイバックシアター、カウンセリングという手法自体の共通点について、

①不可欠な要素、②社会貢献、③治療効果、の3点から考える。

① 不可欠な要素

プレイバックシアターの不可欠な要素として「社会性」、「リチュアル」、「芸術性」の

3つが挙げられている。これら3つの要素が統合されている場合に「質の高いプレイバックシアター」になるとされている⁶⁾。これらのうち、筆者は「社会性」と「リチュアル」がカウンセリングの場においても共通して不可欠な要素であると考えている。

まず「社会性」について、プレイバックシアターは、テラーの個人的体験が、視点を変わると家庭問題、住宅事情、教育問題、少子化問題、女性問題をも含む現代社会への問題提起でもあるとされており、またテラーのストーリーにおいて、その体験の背景となっている政治・社会情勢やその場所の地域性などの知識が求められている⁶⁾。一方、カウンセリングも同様で、クライアントの話の奥に潜む問題やそれを取り巻く環境、社会情勢をイメージすることは必須であり、その問題がどこに存在するかという視点を常に持ち続けなければならない。特に被虐待児やDV被害者など、生死に関わる問題の場合などは、最も重要であり必要な視点である。

次に「リチュアル」であるが、プレイバックシアターは、安全と変容する力がもたらされるとしている。リチュアルが守られていれば、人がもつ自浄作用がおのずと働き、やがて気持ちが落ち着いていくものであり、また枠があるからこそ自由になれ、枠に守られてふだんと異なる世界を味わえるとされている⁶⁾。一方、カウンセリングの場において、この安全で安心できる場作りは、まずカウンセラーが行わなければならない始めの一步である。クライアントにとって、秘密が守られること、身の安全が確保されていること、どのような話が出てきても安全・安心な場であることなどが重要であり、またカウンセラーとクライアントの関係性がこの場・この時間内限りに行われることなどの枠組みも両者にとって必要となってくる。

最後に「芸術性」であるが、これは必ずしも一致する・しないの判断がつきにくい。カウンセリングの中にも、芸術的な要素を捉えてカウンセリングを行う方法も存在するだろう。ユング分析心理学は、カウンセリングの場で芸術的要素を取り込まなければならないことはまずない。しかし、河合は「カウンセリングはオーケストラを聴くように聴く」と語ったこともあり、その中には社会性を聴き取ると同時にその表現力や独創性を交えて、それらを「総合的芸術」として話を聴くという方法も必要であるとしている。しかし、プレイバックシアターのように、この「芸術性」を大きく掲げてカウンセリングは行われるものではないと筆者は考える。

②社会貢献

プレイバックシアターは、社会の改善と安全に貢献する演劇であろうとしている。物が豊かになった今日、人の心がその分貧しくなったり、孤独を感じている人が増えたりしていることは明らかである。ジョナサン・フォックスが目指したのは「コミュニティーの回復」を行う演劇であった⁶⁾。一方カウンセリングは、大きく社会貢献のためという目的を指針とするものではない。しかし、物質社会に置き去りにされた個人個人の心を救い上げることを目的としていることは、つまり広い目で見ると社会貢献の基盤づくりにつながっていることといえよう。

③治療効果

プレイバックシアターは心理療法を目的としていないが、結果的に治療効果をもたらすとされている。人々が「癒された」と感じる背景にはいくつかの要因があるが、宗像によると、ジョー・サラはヒーリング効果の要因として、「語ること」、「受け入れられること」、「芸術の効果」の3つを挙げている⁶⁾。この3つのうち、筆者は「語ること」、「受け入れられること」が、カウンセリングの場においても同様に治療効果があると考えている。

まず「語ること」であるが、プレイバックシアターではテラーが「癒される」というのは、自分のアイデンティティーを確認できるからであり、自分自身がどういう人間なのか、そして自分が世の中とどう関わっているのか、つまり自分が誰であるのかを認識していくとしている⁶⁾。カウンセリングの場でも、これと同様のことが起きていると考える。プレイバックシアターにおいても、カウンセリングの場においても、テラー及びクライアントは自分のアイデンティティーを確立していく作業を行っているといっても過言ではないだろう。

次に「受け入れられること」であるが、プレイバックシアターでは、このことによってテラーは癒しを得られるとしている。ここには、「批判、忠告、アドバイス、分析、解釈など」が存在しない⁶⁾。自分の語ったことが無条件に受け入れられるのである。一方、カウンセリングでは、これらを総称して「受容」という言葉で表現されることが多い。カウンセリングの手法にも様々な方法が存在していることから、一概に「批判、忠告、アドバイス、分析、解釈など」がすべて当てはまるとは言い切れない面もある。しかし、ユング分析心理学では、ほとんどが当てはまるのではないだろうか。ただ、ここ

で注目しておきたいのは「分析」だ。「分析」という言葉の概念の捉え方にもよるが、筆者が「教育分析」という言葉を掲げていることからカウンセリングには「分析」という視点があることがわかる。しかしユング分析心理学においては、クライアントに対して「あなたはこういう人だからこうだ」とその人を一定の枠に捉えるような「分析」ではなく、クライアントの状態を把握し、今後の指針を示すための方向性を捉えるための作業である。

(2) プレイバックシアター実践者とカウンセラー

次に、プレイバックシアターとカウンセリングを行うそれぞれの実践者について考えてみる。

① 必要とされる能力とスキル

プレイバックシアター実践者には、体験的に習得したスキルと体系的に学習した知識が必要とされており、スキルについては、継続的に活動し、公の場や責任ある立場で実施するには多年の経験を要することであり、知識学習については、芸術、心理、教育、社会情勢、歴史など、習得すべきであるとされている。そして大切なこととして、各分野の専門家がプレイバックシアターの実践者になるには、それぞれが過去に学んでいない知識を学び、新たなスキルを開発することが望まれることであるとしていることだ⁶⁾。

一方、カウンセラーも、カウンセリングの臨床を継続的に行うこと、知識学習においても多岐に渡って学ぶことは、クライアントを取り巻く環境を理解する上でも必要なことであると考えられる。ただ「新たなスキルを開発する」ことについては、手広く多くのカウンセリング手段を学ぶことではなく、自分自身の能力をさらに深めることが重要であるとしていると筆者は考える。

② 深い感情を扱える能力とスキル

プレイバックシアター実践者には次のようなことが求められている。

実践者には、心理学の知識やセラピストとしての素養も求められる。(中略) どのようなストーリーが語られても冷静に受け止め、テラーの望む結果を出すためには、他人の深い感情に動じない精神的な強さが必要となる。ジョナサン・フォックスがスクー

ルのカリキュラムとしてサイコドラマを導入しているのは、モレノの理論からグループプロセスを学ぶためと、心理療法としてのサイコドラマによって自分や他人の深い感情を扱う準備をするためである。(中略)カンパニーメンバー、そして特にコンダクターが、場にあふれんばかりの感情を扱えなくてはならない。(中略)多くのアクターはまだ自分はこのような「強い感情」を扱う準備ができていないと本能的に感じている。芸術性の高い演技力や社会的スキルをもっている、強い感情が出るとその場を辞退することもある。その方が望ましい。そして、通常のパフォーマンスで観客からあまり深いストーリーが出てこないと感じているとしたら、それは観客が本能的にアクターたちは深いストーリーを扱うほどに熟練されていないと感じているからなのである⁶⁾。

一方カウンセラーは、常に他人の深い感情を扱い続けている。クライアントは、何らかの問題を抱えて訪れてくるわけであり、それは必然のことである。クライアントが重い問題を抱えつつも深い感情の話が出てこないとしたら、プレイバックシアター実践者と同様、カウンセラーも、深い感情を扱うほどにカウンセラーが熟練していないことが言えるだろう。このことは、カウンセラーにとってその純粋性と存在意義を問われる致命的な問題であると言える。

③社会的責任

プレイバックシアターにおいて、個人に対しても、社会に対しても、大きく影響を与えることから、すべての人への配慮と社会的な責任が要求されている。フォックスは、プレイバックシアターの実践者が契約事項として守るものとして次の4つを挙げている。

- ・個人の体験を演じること
- ・個人を尊重すること
- ・安全であること
- ・公平であること

これらの中で「個人の体験を演じること」、「個人を尊重すること」、「安全であること」の3つが大きくカウンセラーと共通していると筆者は考える。

まず「個人の体験を演じること」であるが、プレイバックシアターの実践者が演じるのは、参加している人が実際に体験したことのみであり、特定の個人であるテラーの実

体験を即興劇とするものである⁶⁾。一方、カウンセラーが「演じる」というのは、どういうことであるか。筆者のカウンセリングの師がこう語ったことがある。「カウンセラーは、クライアントの話を聴き、それをイメージし、それを表現する」。カウンセラーはその純粋性でもってイメージし、それを表現する。これによりクライアントは曇りのない状態の鏡に映し出された自分自身を見つめ直していく。プレイバックシアターの実践者が「演じる」ということは、まさしくこのことを意味することであると筆者は考える。

次に「個人を尊重すること」についてであるが、プレイバックシアターの実践者において、テラーは、いつも個人として尊重されており、テラーが見たいと願う内容を見たい程度にまでのみ再現するとしている⁶⁾。一方カウンセラーにとっても、クライアントは個人としてまず尊重されていることが重要である。常に「自分のクライアントは誰か」ということを念頭に置いておかなければ、子どもの相談を受けながら親の立場でフィードバックしてしまうというカウンセラーとしての根本を問われる行動に出てしまうであろう。またクライアントの現状を見極めることも重要で、クライアントがまだ踏み入れられない領域にカウンセラーが先走って影響を与えてしまうと、クライアントをひとり置き去りにしてしまうという現象が起きてくる。

最後に「安全であること」については、前段の「リチュアル」で述べたとおりである。

なお、「公平であること」について、プレイバックシアターの実践者は、ほかの人を傷付けることにならないよう配慮することが求められている⁶⁾。これは個人対個人のカウンセリングの場では考えにくい場面設定であると考えられる。ただ、エンカウンター・グループ(複数の人が集まって意見を言い合うカウンセリング手法の一種)などを行う際に、カウンセラーがファシリテータを務めることがあるが、その折には、誰がまだ発言をしていないのか、誰がここでは苦しい立場になっているのかなど、場を均衡に保ちメンバーをさりげなくフォローすることが求められる。この点についてはプレイバックシアター実践者と同様であるとも考えられる。ただし、ユング分析心理学において、エンカウンター・グループが治療目的の手段として取られていることはあまり例を見ないことである。

以上のように、プレイバックシアターとカウンセリング、プレイバックシアター実践者とカウンセラーの共通点について、比較を行いながら検証してみた。このことから、両者間において異なる点も存在はするが、共通点が多く存在していることが明らかとなった。

Ⅲ章 プレイバックシアター実践者の現状

この章では、実際にプレイバックシアター実践者が教育分析等の経験がなかった場合、どのような問題が生じてくるのかを筆者なりに考察する。

(1) プレイバックシアター実践者の課題

冒頭の序章にてアクターの例を挙げたところであるが、筆者がこれまでいくつかのパフォーマンスを経験してきた中で、コンダクターの絶対的な存在感と強い方向性が示唆されることでテラーの話が思わぬ方向に導かれてしまったり、アクターが自分自身の課題と思われる何かに支配されて動けなくなったり、テラーが語っていない話を演じて違う話の流れになってしまったりといったことがあった。

これは、筆者がプレイバックシアター実践者として実践する側のことも含めての課題でもあることは言うまでもない。

テラーのストーリーがアクターの心の中の何かに接触し、それによってアクターの心の扉が閉じてしまい、演じることはおろか、テラーの話を聴くことさえできなくなってしまう、また、テラーが語ったものではないものがアクターの心の中に生じてきて、「これはテラーの話ではない。自分の話だ」と思いながらも演じてしまったということがある。これらのことから、テラーのストーリーに対して、プレイバックシアター実践者の中にある何かが、純粹であろうとする実践者自身の行動や心情を阻害していることが考えられる。アクターがテラーの語った内容と異なることを演じた場合、コンダクターによる終わりのインタビューでそれを確認、修正することができる。コンダクターはイベントの責任者として存在している。注意深くテラーの様子を見て⁶⁾、上演後に違っていたかどうか、どこが違っていたのを確認する。テラーのストーリーは、アクターとコンダクターの協業によって再現され、完結する。そのため、コンダクターにもテラーのストーリーを理解する上での純粹性が求められる。

(2) テラーから見たプレイバックシアター実践者の姿

最近、長年プレイバックシアターを経験した者が、プレイバックシアターから離れていく姿にあちこちで遭遇してきた。「プレイバックシアターを見ることから遠ざかりたい」という声を実際複数の者から発せられている。プレイバックシアターに対する危惧のようなものがそこから感じられた。

筆者自身テラーを経験して、心から「よかった」と思えた経験は数える程度しかない。また、筆者がプレイバックシアター実践者として、実施後に後悔をする経験も多くある。

なぜこういったことが起きるのかを考えるため、プレイバックシアターから遠ざかりたい、あるいはプレイバックシアターで傷ついた経験をしたことがあるといった複数の人に、どのような経験がそのような気持ちにさせていったのか、実際のところを聴き取ってみた。

- ・語ろうと思っていなかった話をコンダクターによって強く促されてしまった。
- ・語ったストーリーが、コンダクターの言葉によって何か方向性を変えられて受け止められてしまった。
- ・善意のアクターたちが、テラーが語ったことではないセリフを語り演じることによって、段々こちらの心が静かに萎えていき、思わぬ方向に創り上げられてゆくストーリーを客観的に見始め、最後には心の扉を閉じてしまった。
- ・驚くほど美しい旋律の音楽が奏でられたが、それはどこか既成のものであって、自分が語ったストーリーから、かけ離れているように感じた。
- ・ストーリーの終了後、満足そうな出演者たちに対して、心のどこかにあるはずであろう謝辞を述べなければならない状態にあった。高揚した出演者たちの表情に対し、自分だけが違う世界にいるような疎外感があった。

こうした言葉が、上演者に向けて直接語られることは少ないため、実践者は気づかないことが多いと考えられる。公演を行った高揚感や、自己満足のため、テラーの状態、自身の不適切なアクティングやコンダクターとしての言葉などに意識が向かない可能性がある。

(3) プレイバックシアター実践者に求められる純粋性

フォックスは、「Integrity への路」⁷⁾ で、次のように述べている。

プレイバックシアターは、*Integrity* を要求します。また、プレイバックシアターは *Integrity* を教えるものだと私は信じています。(中略) プレイバックでは、明らかに正直さを要求し、自己満足を奨励しないようです。プレイバックでは、絶え間なく自分と他者についてきちんと区別をしていなければなりません。例えば、アクターとしてテラーの話を知ると、どのようにストーリーを演じるかについての弾みを得ます。その弾みは本当にテラー(の話)に込められているものでしょうか？それともただ単に自分自身の何かに基づいているものでしょうか？

ステージでは、他のアクターと交流して行きますが、ストーリーを全うするために誠実に他のアクターと協働しているのでしょうか？それとも、観客から愛されたいという欲求のためにステージの真ん中に知らないうちに立っているのでしょうか？

コンダクターとしては、ストーリーを生むための、テラーとの真の相互交流に入り込んでいますか？それとも、自分の権力を楽しんだり（人から）重要に見えたりするためのプロセスを操ってはいませんか？

人の話を聴くということは、大変な作業である。そこには、その人を取り巻く時代や環境、その人自身の個性など様々な角度からその人を考えるということが必要とされている。そして、プレイバックシアターの実践者自身が、自分が生きてきた時代や自分を取り巻く環境、自分自身の個性や自分の経験など、自身で自己を深く真剣に見つめ直し知っておくことなしに、他人のそれらを深く知り受け止めることができるであろうか。筆者がプレイバックシアターを知り得てから、わずか数年しか経っていないが、この間に続々と全国各地にプレイバックシアターの劇団が立ち上がり、実践者が増え続けている。先駆者たちのたゆまない努力と地道な取り組みがあったためと考えられる。プレイバックシアターの輪を広がり続けさせるとともに、実践者がより深くプレイバックシアターに携わっていくことが必要とされていることも考えずにいられない。

以上のことから、教育分析を受けるなど、さまざまな手段で自分自身と向き合い自分を知っておくことにより、自分の深層部分からどんな見知らぬ自分が現れてこようとも、安定した自分を保ったまま、純粋でいられることが可能となってくるのが考えられる。「教育分析」というのは、カウンセラーがカウンセラーであるために受けるものであるため、この手法に限らずとも、深い自己を取り扱う何か他の手法などによって、私たちプレイバックシアター実践者は自分自身でより研鑽し、純粋性を求めることが必要とされているのではないだろうか。そうすることで、どのような状況に巡り合っても、自分を見失うことなく安定した状態を保つことができれば、周囲も安定し安心することのできる場が提供できるようにもなってくるであろう。プレイバックシアター実践者は、自分と向き合うという困難な道を歩む決断も必要であると考えられる。

IV章 プレイバックシアター実践者が教育分析等を受けることの効果について

では、プレイバックシアター実践者が、教育分析等を受けることによって、実際どのような効果が得られるのであろうか。

教育分析等を受けることによって、被分析者は純粋性を得て、自他の区別をはっきりつけることができるようになり、自己が確立されてゆくことが定義されている。このことは、カウンセラーとの共通点が多く挙げられたプレイバックシアター実践者にも同様のことと考えられる。

多くの実践者が実際に教育分析等を受けているという現状があるわけではないが、実際に教育分析を行っている実践者から、自己の変化等のうち、深い感情を扱える能力とスキルに役立つ経験について聴き取りを行ったところ、次のような回答が得られた。

- ・揺るぎない力強さを持てるようになった。
- ・自他に対峙し、向き合えるようになった。
- ・自己イメージが変化した。

自分の存在を認めると同時に、その存在に執着することなく、自分を解放できるようになった。

これまで超えることができない強く信じていたものから解放され、楽に乗り越えられるようになった。

- ・自発性が向上し、アイデア等が豊富に持てるようになった。
- ・聴く能力がつき、ストーリーの普遍的な深い心情まで聴くことができるようになった。

どんな感情を持つテラーにも寄り添って、ストーリーを扱えるようになった。

- ・教育分析を受けることと、プレイバックシアター実践者として存在するという両方を経験することが相乗効果をもたらし、自己の成長へとつながった。
- ・自分の感情をコントロールしやすくなった。

怒りや恐れ、妬みなどの、コントロールしにくい感情から解放されていった。

- ・あらゆる感情が心の中から湧き起ってきても、それを冷静に受け止め、客観的に取り扱えるようになった。
- ・自分の感情に自然に付き合えるようになり、常に心が安らかな状態を保てるようになった。

これらの結果は、これからもまた検証を続ける必要があると考える。しかし実際にプレイバックシアター実践者に求められている純粋性や要素が明らかにここに存在してい

ることが分かる。

また、プレイバックシアター実践者としては基より、ひとりの人間としても成長していくことが可能であることが確認できる。自分自身が楽な状態で存在できるということは、周囲に対して及ぼす影響も同様のことが考えられる。プレイバックシアター実践者として存在するために、これらのことは今後扱っていくべき課題のひとつとして捉えておくことは有益であると考えられる。

ただここで注意しておきたいことは、この道には終わりが無いということである。ユングも河合も、晩年になっても常に「まだまだ学ぶことはたくさんある」と言っており、河合は「自己実現といっても、それは確定した一点があって、それに到達することを示すものではなく、つねに進んでやまぬ一つの過程である」¹⁾としている。

プレイバックシアター実践者が純粋性をもってテラーの前に臨むとき、テラーは初めて、何者にも侵されていない純粋な自分自身を投影し、見ることができる。何者にも侵されていないということは、実践者個人のフィルターにかけられることなく、語ったそのままのストーリーを、テラーが何の不安もなく猜疑もなく受け入れられる状態にあるということである。そこには、本来テラーが見たかった状況がそのまま映し出され、自分が語った歪みのない状況が再演されることで、テラーは安心してその場に存在し、ストーリーを見ることができるようになる。

V章 結論

プレイバックシアターに必要な要素である「リチュアル」、「社会性」はカウンセリングにも共通していることが分かった。また、社会貢献、治療効果という特徴も共通していた。プレイバックシアター実践者には、深い感情を扱える能力や、自己を洞察する力が求められるが、これらはカウンセラーにも共通した能力である。そのため、カウンセラーに役立つ、教育分析、及びそれと同様の深層心理に向き合う手段の分析等を受けることは、プレイバックシアターの実践者自身が純粋性を保ち続け、自己成長のため、自己実現のため、そして真のプレイバックシアターの世界を創り上げるために有益であると考えられる。

最終章

終わりに

今回、論文に向き合うことで自分がこれまで取り組んできたことを振り返ってみると、漠然としか理解できていなかったことがあまりに多くあり、まず学び直しから始めなければならないことが山のように存在していた。その作業を繰り返していく中で、プレイバックシアターを様々な角度から、それぞれの考えで受け止めている人に多く出会うことができ、このこともまた、自分の考えを深めるための大きな要素となって自分の中の財産とさせていただくことができた。

内側を見つめる作業は、これからもまだまだ続けなければならない課題である。自分自身についても、劇団自身についても、プレイバックシアター自身についても、すべてにおいて同様である。

これからも、真心をこめて、一つひとつ、取り組んでゆくことで、一つひとつの繋がりを紡いでいけるようにと、心から願ってやまない。

謝辞

まず何より、論文という世界に全く不慣れな筆者の拙い文章を、一つひとつ丁寧に根気よく指導し続けてくださった小森亜紀氏。くじけそうになる頃に必ずメッセージを送り続けてくださった宗像佳代氏。お二人の深い愛情と真摯なお心遣いに、心から心から感謝いたします。

海の向こうからいつも笑顔で支え続けてくださり、人としての大切なことを伝え続けてくださるジョナサン・フォックス氏に心からお礼申し上げます。

また、これまでの出逢いの中で、たくさんの意見や感想、メッセージなどを伝え、教えてくださった多くの皆様に感謝いたします。

そして色々な意見を提供くださり、毎日メッセージで励まし続けてくださった The Grace のメンバー、鈴木氏、小川氏、西園氏、岩崎氏。論文の内容を吟味し、叱咤激励くださった代表筒井氏。心からの感謝を送ります。最後に、その人生をかけて魂のレベルで相手の話を聴くことを教えてくださった故・光山氏に、深く感謝を込め、この論文を捧げることとし、筆を擱きます。

【参考文献リスト】

- 1) 河合隼雄：ユング心理学入門. 初版第 59 刷、培風館、2008
- 2) 河合隼雄：イメージの心理学. 第 23 刷、青土社、2011
- 3) 東山紘久：教育分析の実際. 第 1 版第 1 刷、創元社、2007
- 4) C. G. ユング：元型論. 第 5 刷、(株)紀伊國屋書店、2009
- 5) 山根はるみ：やさしくわかるユング心理学. 第 2 刷、日本実業出版社、2000
- 6) 宗像佳代：プレイバックシアター入門. 初版第 2 刷、明石書店、2010
- 7) ジョナサン・フォックス：IPTN ホームページ. 「Integrity への路」